

近

年、「四国八十八箇所霊場と遍路道」を世界に向けて発信しようと世界遺産登録に向けてさまざまな取り組みがなされています。

本市には札所がないため、関係がないと思う人もいらっしやるかもしれませんが、しかし、本市は八十八箇所大窪寺と徳島県の札所を結ぶ遍路道が通っています。

遍路道には、石に行き先や距離を彫った道標が残されています。本市にも各所に残っており、特に五名地区には江戸時代中ごろの明和4年(1767)に建てられた大窪寺への距離を彫った道標が点在しています。

五名地区の道標は、現在の国道377号沿いにも見られますが、ほぼこの道に沿って流れる大影谷川沿いにもあります。現在、この川沿いの道は数におわられています。明和4年の道標が数点あることから江戸時代はこの川沿いの道が街道であったことがわかります。

坂元地区の大坂峠にも、讃岐国と阿波国の国境までの距離を彫った寛政年間(1789~1801)の道標があります。

時代は下って、明治~大正時代にかけて建てられた道標もあります。その代表は、四国遍路を280

回も成し遂げた四国遍路の大先達と評される中務茂兵衛(弘化2年~大正10年・1845~1921)が建てた道標です。彼は周防国椋野村(現在の山口県周防大島町)出身者で、庄屋の三男として生まれましたが、幕末の慶応2年(1866)に突然故郷を出て、それ以降一度も故郷に帰ることなく、22歳から78歳までひたすら四国遍路を続けました。280度目の遍路の途中、大正11年(1922)2月23日に高松市で78歳の生涯を閉じるまで四国遍路を休むことはなかったといえます。

本市には、①引田の塩屋(分かれん途)、②入野山の馬越峠、③湊の市役所庁舎前、④入野山の上星越の三差路、⑤五名の八丁坂登り口とその道標があります。

入野山と五名にある②④⑤の道標には、三本松港を出港し、大阪~神戸~撫養へ寄港する汽船の出航時間が刻まれています。阪神方面からやってきた巡礼者が大窪寺で結願した後、出航時間がわかるよう便宜を図った心遣いともいえるでしょう。

ところで、江戸時代の終わりごろ、文化年間(1804~1818)に引田村から四国遍路に出た人々の記録をみると、大半が2月(現在のほぼ3月ごろ)に旅立っています。農作業が始まる春前に旅に出たのでしょう。

2月を過ぎると春の気配が感じられます。ウォーキングとして道標めぐりはいかがでしょうか。



▲大影谷川沿いの遍路道

(文責 歴史民俗資料館)

讃岐歩む

人生たそがれ期になると、日常会話まで湿っぽくなる。友に出会おうとまず「誰かが死んだ」。世間話がなくて病気や医者への愚痴で終わる。これが幼なじみとなると「葬式どうする」「墓は:。」

だから近頃は父母の墓参りに帰郷しても、誰にも会わずそつと里を後にすることになっている。確かに死について考える境地にはなった。しかし還暦

のころよく思った、生きざまが悪いからせめて死にざまは潔ぎよく、などという甘つちよい考えは今はない。

ものの本で読んだが作家の芥川龍之介は「生きるために生きていく」我々人間の哀れさを感じて:と若くして自殺した。そして太宰治も「小説を書くのがいやになった」と自ら命を絶った。アカデミックな鬼才であるが故の凄絶な死生観というほかない。

しかし年を重ね病床にあった歌人の北原白秋は、ふる里(福岡県)を想い「水郷柳河こそは、我が詩歌の母:この地相にして、はじめて我が体が生きし我が風は成った」とまで書き連ねた。

そしてわが讃岐の文豪、菊池寛は、病の床で母を慕い、母を偲び母のことを書き綴って逝った。これほどの希びとでも、晩節はやはりふる里と母に尽きる。

もう死生観などと粋がるのはよそう。肩に積もった罪悪感、そのための自死思考は脇に置いて、できれば私も、ふる里の亡き母の温もりへまっ白な気持ちで還りたい。今、老いて思う。

ジャーナリスト 田立院 翔